The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヒンディー語図書出版の現況 : ヒンディー語出版界の特色
Author(s)	ヴァルマー, ダヤーナンド
Citation	印度民俗研究. 1976, 3, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50343
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヒンディー語図書出版の現況

―― ヒンディー語出版界の特色 ――

ダヤーナンド・ヴァルマー

ある雑誌編集者と話した際，ヒンディー語による出版物の評判に話題が及んだことがあった．この編集者曰く，２０万部にも上るほど版を重ねているような本が一般大衆の読書態度を穢している．すべからくこの種の本を取締るべきだ．

これに対して私は，人を犯罪に駆りたてたり道義の頽廃を助長するようなものであれば取締りの対象とされるべきだが，その根拠を本の中味ではなく発行部数にするというのなら納得しかねると言ったのだった．

発行部数を取締りの根拠にする理由をこの編集者はこう述べた．「こうした本は大々的な宣伝機関に乗って大衆を圧倒してゆくものだから高尚な文学が抑えつけられてしまう．このような（低俗な本）が出なければ，純文学作品が日の目を見る機会にもっと恵まれるはずである．」

しからば，『アクバル・ビールバル・ヴィノード』[1]，『アールハー』[2]，『サーランガー・サダーヴリジ』[3]，『トーター・マイナー』[4]，『ナナディー・ボージャイヤー』[5] など農村に愛読者を持つ書物をどう考えるおつもりか．これらはいずれもその売上げ部数は毎年数十万冊にも上るのでありますぞ．

編集者にはこの事実は信じられない様子だった．

出版業界のあらゆる部門の内部事情に精通していなければどこかの機関の大量購入図書の目録（Bulk Purchase）に掲載もされず，また新聞・雑誌等で宣伝広告されないにもかかわらず年間数十万部も売れる本があるという実情をだれも信じる気にはなれまい．

民間伝承文学及び大衆文学の重要性を無視しては純文学のそれは語れない．高級な文学の読者も作家も民間伝承の文学を拠り所にしてそれぞれの今日に到達し得たのである．

幼少の頃祖母や母親の話してくれる数々の物語に誰しも心を躍らせるものであるが，これをきっかけに文学の世界に足を踏み入れる人たちの中には『ソーラティー・ブラジャーバール』[6] とか『シンハーサン・バッティーシー』[7] とかの世界にとどまって生涯を過ごすものもいる．また中には三文小説や大衆雑誌をもって終着点とする人たちもいる．そして一段と知識欲に燃える人たちはこれらの通俗的な作品をしばしの足休めの場と見なして深い思索へといざなう作品にまで歩を進めるのである．

文学，すなわち真の文学の読者と称せられる高級な文学の数少ない読者は，民間伝承文学，あ

るいは，表層の文学の読者と言われる幅広い読者層の中から濾過されて現われるものである．その根底をなす読者層が軽視されるとなると筆者の脳裡にはプーナとナーグプルで開催された会合での講演が思い起こされることになる．

全インドヒンディー出版社連盟[8]のプーナ大会の席上，R・M・シンデー氏[9]はこう語った．「ヒンディー語普及に力のあったヒンディー語普及団体に御礼の言葉を申し上げたいのであります．なんという団体かと申しますれば「ヒンディー語映画」[10]というわけであります．」また，ナーグプルでの世界ヒンディー語大会[11]の席上，フィジーとかモーリシャス等の国々に住むインド系の代表たちは，それぞれの国でのヒンディー語の普及には『ラーマーヤナ』[12]とか『ハヌマーン・チャーリーサー』[13]，あるいはボージプリー民謡[14]に負うところが大であることを繰り返し述べたのであった．

民衆嗜好を洗練するという名目で民衆の嗜好する文学を蔑視するような文学者たちは恰もピラミッドの巨大な基底部を無用の長物と見なしながらその尖ったてっぺんを保存できるものと考えているようなものである．

ヒンディー語で書かれた本は売れないとか，ヒンディー語を話す人たちは読書の関心が低いとか泣き言をいう人たちがいるが，筆者はどうもこの意見には賛成しかねる．ヒンディー語を話す人たちが書物を求める気持はどの国の人たちにもどの地方の人たちにも劣っていない．どの程度の知的水準の人が多いかによってそれぞれの地域で所望される書物の程度が決まってくるわけである．八割の人たちが農村に住んでいるのは何ともし難いのだ．現代科学に縁のない農民は，民間伝承に愛着をもっている．それらは昔話や伝説，詩あるいはノータンキー劇[15]，ワールティク[16]といった色々な形態で伝えられてきている．

農村に住む人たち程度の知的水準の都会の人たちも知識は比較的豊富である．従って伝統的な『ヒール・ラーンジャー』[17]とか『ハーティームターイー』[18]のような恋愛譚や伝奇小説の登場人物を近代的な道具だてのもとに見て楽しんでいる．伝奇小説や推理小説が一般受けする秘密はここにあるのである．これらの中には出来不出来もあるが，数十万部もの版を重ねるような本なら間違いなく母親が娘の前でまた父親が息子の前で広げて読んでも恥ずかしくないような小説である．表紙にさらにカバーをつけて読まなければならないような作品はどうしても大量に出ることはない．

大衆文学の範疇に入る著作の版権は著者もしくは出版者が握っているのでその売上げ部数を調べるのは難しいことではない．民間伝承文学は概して版権には関係がないので，一般に親しまれているものはいくつもの出版社から出版されている．しかしその売上げの総部数を調べるのは比較的困難である．それらの推定売上げ部数と文学界で取り沙汰される作品の売上げ部数と比べてみると驚くべき事実が多数明らかにされるのである．

トゥルシーダースの『ラーマーヤナ』は宗教書として，民間伝承の物語として，また古典として三つもの範疇に入れられる．このうち古典としての売上げ高は容易に他と区別できる．『ラームシャラーカー・プラシュナーワリー』[19]及び後世に付加された物語[20]を折り込んだ『ラーマーヤナ』は民間伝承文学及び宗教文学の範疇に入る．ナーガリー・プラチャーリニー・サバー[21]とかヒン

ドゥスターニー・アカデミー[22]といった3，4の出版社から出ている立派な校訂の『ラーマーヤナ』はそれら全部の売上げを合わせても年間2万5千部に満たないであろう．一方，30社ほどの民間伝承文学を専門にしている出版社がこの『ラーマーヤナ物語』の「完」「抄」様々な版を多数出している．これらの版の売上げ部数はそれぞれ年間平均2万5千部に達している．これらを総計した数字にヒンディー語を愛好する人はだれしも満悦するであろう．その上，この数字は年々増加してきているのである．

文学的価値を認められている大衆文学の作品にデーヴァキー・ナンダン・カトリー[23]の著作『チャンドラカーンター』[24]がある．この本の推定売上げ部数は年間一万部である．『ジャヤドラタ・ヴァダ』[25]，『クルクシェートラ』[26]，『ガバン』[27]，『カーマーヤニー』[28]などの売り上げは『チャンドラ・カーンター』の数倍にも上るが，それはこれらの本が学校の教科書に指定されているという背景による．教科書の指定からはずされた場合，これらは『チトラレーカー』[29]，『グナーホーン・カー・デーワター』[30]，『ナディー・ケー・ドゥヴィーブ』[31]，『ティヤーグ・パトル』[32]ほどには売れぬだろう．

他方，民間伝承詩の一つである『アールハー』の武勇伝は全国で15余りの出版社が出しているが，どの版の言葉もそれぞれ他と異なっている．52の合戦のうち「インドラハラナ」，すなわち，「バラクブカーレの合戦の巻」[33]に一番人気がある．この巻の各社の売上げを総計すれば年間5万部に達する．そのほか，若干の巻は2万5千部ほど売れる．残りの巻はそれぞれ2万5千部から5千部ほど売れている．

ヒンディー語でポケット・ブックがお目見えする以前，つまり今から20年ほど前まではどんな小説も年に5千部売れれば大成功と考えられていたのだが，今日では，ポケット版で1万5千部刷るのは極く普通のこととなっている．6桁の数字を誇る作家はグルシャン・ナンダー[34]ただ一人である．彼に次ぐ作家として7万〜7万5千部を出せるラージヴァンシュ[35]がいる．この二人の後に続く作家を人気順に挙げるならば，サミール，[35]ロークダルシー，[35]ラーヌー，[35]オーム・プラカーシュ・シャルマー[36]といったことになろう．2万5千〜3万部に迫る作家は他にも十指に余るほどいる．

純文学と大衆文学の両分野で等しく名声を得ている作家にシヴァーニー，[37]グルダット，[38]チャトルセーン[39]がいる．これらの作家の作品がポケット版で新しく出れば年間2万〜3万部は売れ，単行本もやはり2〜3千部はかたい．

次に政府の大量購入の図書目録に掲載されなくてもまた教科書に指定されなくても売れるフィクションの作家には次の人たちがいる．――ヴィマル・ミトラ，[40]バグワティーチャラン・ヴァルマー，[41]ニルマル・ヴァルマー，[46]プレームチャンド，[42]シャラット，[43]これに続くグループにクリシャン・チャンダル，[44]アッギェーエ，[41]ジャイネンドラ，[41]アムリター，[45]カムレーシュワル，[46]ナーガル，[47]ヤーダヴ，[46]ラーケーシュ，[46]ヤシュパール，[41]イラーチャンドラ・ジョシー，[41]アシュク[41]等が名を連ねている．これらの作家の作品の売上げ部数は出版社の腕次第で5百〜2千部といったところである．

演劇の分野ではノータンキー劇と純文学的な舞台演劇とでは比較の対象にもならない．ラーム

リーラー[48]用には大小様々の構成の幾十種もの版が出ている．北インドで最高の売上げを誇っているのはヤシュワント・シンハ・ヴァルマー[49]の『アールヤ・サンギート・ラーマーヤナ』である．１５ルピーもするこの『ラーマーヤナ』が年間１万部は出る．法に触れるようなことを平気でやってのけるある出版社の主人がすでにこれの海賊版を出している．１ルピーでラーマー劇を堪能させてくれる小冊子も十種類ほど出ている．クマーオニー[50]とかガルワーリー[51]あるいはアワディー[52]等といった幾つかの地方語で出ているラーマー劇は今数えたものとは別である．購読する人たちのうちラーマー劇を実際に演じる人は少なく，読んで楽しむ人のほうが多い．

ノータンキー劇ではビカーリー・タークル派[53]のものがヒンディー語圏の一番東の地方を支配しているのに対し，シュリー・クリシュナ・パハルワーン[54]やナッター・ラーム・シャルマー・ゴール[55]派はヒンディー語圏の中東部及びブラジ語[56]地方で人気がある．北部州（ウッタル・プラデーシュ）の西部ではチャンドラバートとバルワント[57]が幅をきかせており，ハリヤーナー州ではラクニー・チャンド，それにマーンゲー派[58]のラーガニー[59]がかなり売れている．ヒンディー語圏最東部地方[60]では『ジャーリム・シン・ナータク』，中東部では『パティバクティ』，『ムハッバット・キー・プトリー』[61]，ブラジ語圏では『アマル・シン・ラータール』や『インダルハラン』[62]が最高の売れ行きを示しており，それぞれ年間１万部は出ている．

パールシー劇団[63]の演劇の時代はもはや終わった．当時の台本が欲しい人もアーガーハシュラ・カシミーリー[64]の全作品を手に入れようと思っても入手不可能である．出版社が二，三点出したことがあったが，売れなかったのである．ラーデシュヤーム・バレーリー[64]の作になる戯曲は二十篇にものぼるが，そのうち『ヴィール・アビマニュ』，『シュラヴァナ・クマール』，『クリシュナ・アヴァタール』[65]の好調な売れ行きに海賊出版社の連中は口から涎を流しているわけである．

ラメーシュ・メーフター[66]，ジャグディーシュ・シャルマー[67]，チラン・ジート，ギャーンデーヴァ・アグニホートリー，レーワティー・サラン・シャルマー[68]等は今日的問題をテーマに詩や歌を交えず戯曲を書いている．これらが上演される場所も幾つかの都会に限られているので売上げも限定されている．

戯曲に関して一つ興味深いことがある．上に挙げた本が売れる季節は ラームリーラー の季節と一致することである．このような雰囲気の中で幕間劇の形で他の戯曲も同時に上演されているというわけなのだ．プラサード[69]，ジャグディーシュ・マートゥル[70]，モーハン・ラーケーシュ，ビシュヌ・プラバーカル[71]，アシュクの戯曲は，概ね教科書に指定されているので売れ行きがよい．実験劇団[72]は新しい試みをしてはいるがそれが売上げに特に影響を及ぼすほどではない．それらよりもよく売れるものにテーンドゥルカル[73]の作品がある．

詩――教科書に指定されているか，詩会で嘆声を浴びるような詩人の作品が売れるのである．以前詩会でバッチャン[74]，ニーラジ，バイラーギー[75]，ヴィヤース[76]が得ていた地位を今ではカーカー・ハートラシー[77]が独り占めしている．

評論及び研究論文の項目に載るものがヒンディー語の出版目録の中では一番多い．図書館がこれらの本を買い入れるので出版社は発行部数千部の内年に２５０部ほどの売れ行きを見込んで刷る．

残部は本の漬物というわけで店や倉庫を飾り立てるのに一役かう．値段は５年間に半分売れれば少なくとも原価は取り戻せる勘定で定められる．ナゲーンドラ博士[78]とかハリーリープラサード・ドゥヴィヴェディ先生[79]のような著名な学者の著作は再版も出る．

随筆はラームチャンドラ・シュクル[80]のものであれば大学の上級学年の学生が試験勉強のために買い求めるが，他はニバンド（随筆）の前にラリット（Lalit）[81]という形容詞をつけねばならない．そうした上でもなおかつこの種のものを売り込むにはいろいろと頭を痛めねばならぬ．

Subject Books 教科図書などと呼ばれている文学以外の図書，すなわち，経済学，地理学，歴史学，化学，物理学，農学，植物学，社会学等の図書は今から十年前までは無きに等しかったが，今日では州立サーヒトヤ・アカデミー[82]の後援のもとで学部以上のレベルのものが相当数出版されている．その中で新しく書かれたものは少ないが，ヒンディー語では限られたものしか手に入らないという非難を免れしめるには十分なほどになってきている．

宗教や哲学，精神生活に関するものではラーマーヤナを凌ぐものにバガヴァッド・ギーター[83]がある．ヴェーダーンタ哲学やバクティ道[84]に関する伝統的な作品がそれに次ぐ．この分野の問題を扱った近代の著作者の中ではこれまでヴィヴェーカーナンダ[85]やスワーミー・ラームティールト[86]の名が高かったが，現在はアーチャーリヤ・ラジニーシュ[87]の著作が大変な勢いを保っている．それらは今や売上げの面で大衆小説と競い合うまでになっている．つまりポケット・ブックで２万５千～３万部，単行本で２～３千部の売行きである．単行本で３０～４０ルピーもするものでもラジニーシュの信者達は競って買い求めるのである．

芸術性の高い文学，大衆文学及び民間伝承文学の年間売上げに関連して上に数字をあげてきたが，これについてはっきりさせておかねばならぬことがある．すなわち純文学の著作の購読部数は向う数年の内に２５～３０％減少する．その中には時間の隔たりの影響がはっきり現われるものも出てくるが，大衆小説のものはこれから先数年の内に半分から四分の一に徐々に減って行き，ついには無きに等しくなる．民間伝承文学に入れられるものの売上げには何ら時代の影響は見られない．

上に述べた三通りの読者層の読書態度，言いかえれば書物に対する心の持ち方を調べてみると民間伝承文学の愛読者は書物を尊崇の対象と考えていることがわかる．『アールハー』はただ黙読するだけのものではなく読唱すべきものであり，読唱後は大切に包み切れにしまっておくべきものなのだ．大衆小説の読者は読んで楽しんだ後は書物をまるで使い捨てにする木の葉の器のように考えている．また演壇に立ってヒンディー語図書普及度の低さを憂慮する文学愛好家や作家は，書物は購入するものではなく，むしろ贈物として頂戴するものだと信じている．従ってヒンディー語図書の普及に関する問題で検討の対象になる「図書」とはいつも高級な読者のお気に召すものと決まっているわけである．　　（１９７６年　７月）

(註)　＊印は訳註，他は原註．

１＊ “Akbar — Birbal Vinod” ムガル朝のアクバル王とその廷臣で詩人のビールバルとの対話形式をとる頓智話集．ビールバルが頓智でアクバル王をやりこめる話と考えればよい．

2　Ālhā　12世紀北インドに現われたとされる英雄。アールハーとウーダルは兄弟でアールハーが兄である．この二人の武勇伝は最初バート（吟遊詩人）のジャグニクによって語られたが，これを基にして北部及び東部インドの多くの詩人たちがそれぞれ各地の方言で二人の活躍を極端なほど勇壮な調子で独特の韻律でうたいあげてきた．その韻律は後になってアールハー調の名で呼ばれるようになった．アールハーとウーダルは自らは王家の出ではなかったが二人を味方につけた王は有利になるのであった．当時の小さな王国間の戦いの原因も甚だ奇異なことばかりであった．例えばある祭礼でまず始めに沐浴する権限はある家系のものなのにだれが先に沐浴したとか．このようにして彼等の敵対心は代々受け継がれていった．アールハーに関しては全部で52度の戦いが描かれている．ジャグニクの著した原本は今日手に入らないが，彼が生み出した人物アールハーはヒンディー語圏の農村では到るところで崇められている．農村では灌漑の仕事から解放される雨季に農民が一座を組んで歌う．この物語は史実性に乏しく虚構性に富むものである．

3　Sāraṅgā という美女と Sadāvrij という名の若者の恋物語に基づいた民間伝承の詩．

4　"Totā — Mainā" の中では女性に対する男性の不貞を扱った話が雌のマイナー（九官鳥）の口から語られ，男性に対する女性の不貞を扱った話がトーター（雄の鸚鵡）の口から語られる．原作はウルドゥー語で書かれているが百年程前にランギー・ラールがヒンディー語に翻訳している．

5　Nanadī Bhaujaiyā　東部の女性の間で歌われている愛別の歌．

6　美女 Soraṭhī と若者 Brajābār の恋を歌った詩．

7＊　"Sinhāsan Battīsī"（獅子座32話集）（1801年）ヒンディー散文の発達に重要な役割を果たしたアーグラー出身の Lallūlāl の筆になる説話集．サンスクリットの "Sinhā-sanadvātrimshikā" の散文による翻案であるが，今日，これは多数の出版社から発行されている．

8＊　Akhil Bhārtīya Hindī Prakāshan Sangh（全インドヒンディー出版社連盟）のプーナ大会
毎年一回インド全国の出版業者が会合をもち，出版事業の諸問題に関して意見の交換，及び出版物の展示を行なう．

9　マハーラーシュトラ州のプーナ市の出版社主．

10＊（ヒンディー映画）インド人の娯楽の筆頭にあげられるのが映画鑑賞である．ヒンディーを含むインドの年間映画製作本数は，アメリカに次いで世界第2位である．座席は全部指定制で，通常一日4回一本立ての上映である．またヒンディー（ヒンドスターニー）流行歌はすべてスクリーンで歌われたものである．

11＊　Vishva Hindī Sammelan　1975年1月10日～14日迄の5日間，マハーラーシュートラ州のナーグプル市にて開催，世界各国から代表（ヒンディー語・文学研究者）及び国内の作家，ジャーナリスト，思想家，ヒンディー普及推進活動家らが一堂に会した史上初のヒンディー語の国際大会．ヒンディー語の現状，育成，将来の展望及びヒンディー語の国際性に関して活発な意見の交換が行なわれた．また，ヒンディー語普及に一役かっている書籍，タイプライター等の展示物の会場も同時に設けられた．

12＊　Rāmāyaṇa　マハーバラタと並ぶサンスクリット語の大叙事詩に基づきながらもラーマ信仰

の立場から神格化されたラーマの行蹟をアワディー語で歌いあげたトゥルシーダース Tulsīdās（1532－1623）の叙事詩“Rāmcarit Mānas”.

13＊ Hanumān Cālīsā（猿将士ハヌマーン40頌） Tulsīdās の作と伝えられる詩集であるが彼のものとは確認されていない.

14＊ ボージプリー語の民謡. ボージプリー語はビハール州の西部からU.P.（北部州）東部にかけて話される言語. フィジー, モーリシャス, ガヤナ（旧英領ギアナ）, スリーナーム等の国々のインド系住民は, ビハール州西部からU.P.東部のボージプリー語やアワディー（Awadhī）語地域の出身者やその子孫が多い.

15 Nauṭankī 農民の間に伝わる芝居の一種. 信仰, 恋愛, 武勇を扱うこの劇は農村において今日でも晴天の続く季節に屋外で演じられている. 高い舞台に幕を引き, アマチュアの役者がノータンキー劇を演じる. 大きな声で語られる台詞はマイクの助けを借りずして数千人の聴衆に聞こえる. 楽器は主にドールやナガーラー等の太鼓である. 台詞は散文体は少なく韻文体が多い. 名の通った劇団によるノータンキー劇となると20マイルもの道をはるばる歩いて見物にやって来る人もいる. 女役も男性が女性に扮してやる. 映画の普及に伴って今日ノータンキー劇はすたれる一方である.

16 宗教界の用語や一般民衆のことばで, 「ワールティク（Vārtik）」とは散文（ガディヤ）と同義に使われる.

17＊“Hīr-Rājhā” パンジャーブの大地を背景にヒールとラーンジャーとの愛を切々とうたいあげパンジャーブの人々の生活に潤いと安らぎを与えてきた悲恋物語歌謡に題材をとったもの.

18＊“Kissā Hātimtāi”（Qissā Ḥātim Ṭāī） 寛仁大度なアラビアの伝説上の王で詩人のハーティムにまつわる物語集. ある王子のために求婚に課せられた7つの難問を苦難の後解決してやり見事結婚させるという伝奇的な物語. Ḥaidar Bakhsh Haidarī がペルシア語から翻訳し, Fort William College から1802年に刊行された“Ārā ʻish Maḥafil”に基づく. 今日, デーヴァナガリーで刊行されているものはその抄で, 言葉もかなり改められている.

19 Rāmashalākā Prashnāwalī Horoscope つまり誕生時の星位図を使わないで未来を予見する幾多の方法が占いの本に出ているが, 「プラシュナ（Prashna）」はその中の一つである. 「ラームシャラーカー・プラシュナーワリー」はそれを基本にして書かれたものであり, トゥルシーダースが書いたという説もある. この占いを信ずる人は自己の運勢に関する疑問の回答をこの表から得ることが出来る. これはたて・よこ各15マス目にデーヴァナーガリー文字で書かれた1音節ないし2音節の文字表である. 任意のマス目を細い棒でおさえ, 次にそれから数えて9マス目の文字を書き出す. さらに9マス目ごとの文字を書き出し, 最初棒でおさえたとこまで戻る. 書き出した文字は四行詩の二行を成す. それがその人の運勢に関する回答である. マス目のどこから始めても九種の回答のいずれかになっている.

20 トゥルシーダースの『ラーマヤナ』（ラーマチャリト・マーナス＝ラーマ行状記）の原本になく, 後世の詩人達によって付加された物語をさす. 第8章は全部後世の付加である. アヒラー

ヴァナの殺害，スロチャナーの殉死等の話はヴァールミーキのサンスクリット語の『ラーマーヤナ』やその他の『ラーマーヤナ』にはあるが，トゥルシーダースの『ラーマーヤナ』には本来ないもので後世に付加されたものである．

21＊ Nāgarī Pracārinī Sabhā（ナーガリー文字普及協会）　ヒンディー語の公的使用の地位向上のため１８９３年ベナレスに設立された．ヒンディー語の普及，ヒンディー文献の蒐集，文学活動，出版活動，研究活動などの振興に大きな足跡を残してきている．今日もこの協会からヒンディー語辞典，文法書を始め数多くのヒンディー語による学術図書が刊行されている．

22＊ Hindustānī Academy　１９２７年にアラーハーバードに設立．文学書・学術書の刊行や図書館の運営などの活動をしている，

23＊ Devakīnandan Khatrī（1861−1913）前世紀末から今世紀初頭にかけて活躍した有名なヒンディー小説家．冒険・怪奇的な傾向の作品を著わす．“Candrakānta”，“Candrakānta Santati”“Bhūtnāth”などの作品がある．

24＊“Candrakānta”（１８９１年）　Naugaṛh藩王国の王子ヴィーレンドラ・シンとVijayagaṛh藩王国の王女Candrakāntāとの恋物語が数々の権謀術策により流血をみずして両藩王国間に和解を生む過程の中で見事に語られている．

25＊“Jayadratha Vadha”　マイティリーシャラン・グプタ（Maithilīsharaṇ Gupta）の著作になる詩集（１９１０年），サンスクリット大叙事詩「マハーバラタ」に題材をとったものでアルジュナ王子が出陣中，クリシュナの命令により矢を放ちジャヤドラタを殺害し命拾いするという古代の物語に流麗なカリーボリー語（ヒンディー）で新しい生命を吹込んだ作品．

26＊“Kurukṣetra”（１９４６年）　民族主義者，詩人ディンカル（Dinkar）（１９０８−１９７４）の代表作．大叙事詩「マハーバーラタ」に題材を求め反戦を訴えた詩集．

27＊“Gaban”（私消の金）（１９３０年）　プレームチャンドの代表作の一つ．中産階級の都市生活者の家庭内の問題をテーマにした中篇小説．

28＊“Kāmāyanī”（１９３５年）プラサードの代表作．原人マヌ（人間の祖先）を主人公とする叙事詩集．

29＊“Citralekhā”（１９３４年）　バグワティーチャラン・ヴァルマーの初期の代表作の一つ．舞姫チトゥラレーカーを主人公とする小説．映画化されたこともある．

30＊“Gunāhon Kā Devatā”（１９４９年）　ヒンディー語の総合週刊誌「ダルマ・ユグ」の現在の編集長であるDharmvīr Bhāratī（１９２６−　）の作品．CandarとSudhāのプラトニックな恋を感傷的な筆致で描き上げた長篇小説．映画化された．

32＊“Tyāg Patr”（１９３７年）　ジャイネンドラ・クマールの初期の作品．我々の人生は謎に包まれている．主人公Mriṇāl の人生もまたしかり．

31＊“Nadī Ke Dvīp”（１９５１年）　アッギェーエの二作目の小説．結婚問題，愛，セックスを主題にしており，D．H．ローレンスの「チャタレー夫人の恋人」の影響を強く受けていると思われる作品である．

33　アールハー（Ālhā）に関する５２の合戦の中で最も緊迫感を覚える叙述がこの巻に見られる．インダルという娘がある王に誘拐されたことがこの戦いの発端となっている．

34　Gulshan Nandā　インドで最も人気のある小説家．純文学の中には全く数えられないが小説は最高５０万部の記録をうちたてている．彼の小説は芸術的に熟していないが筋の展開が読む人の心をひきつけて離さない．文学の深遠な域に到達し得ない一般民衆はナンダーの小説を待ち望んでいる．元々ウルドゥーの作家であるが先ずヒンディー版が出てそれからウルドゥー版ということになる．従って一般民衆は彼をヒンディーの作家だと思っている．十指に余る小説が映画化されておりその中で『ダーグ』，『カージャル』，『ナヤー・ザマーナー』はかなり当たった．

35　（Rājvansh），（Samīr），（Lokdarshī），（Rānū）　この四人はグルシャン・ナンダーの系統をひく一般大衆に人気のある小説家である．本名は一般の人々には分からない．彼らの小説は言葉よりも筋の展開に重きが置かれている．

36　Om Prakāsh Sharmā　代表的な推理作家・スリラー作家の一人．他の作家のスリラーが英語のそれを種にしているのに対し彼の小説の舞台はインドである．社会小説もいくつか書いているのだが推理作家としてのほうが知られている．

37　Shivānī　女流作家でその小説はウルドゥー文学の中に入るものと見なされている．

38　Gurudatt　インド文化を小説に盛り込んだ功績はグルダットにある．作品には５０篇以上の小説，１０篇の随筆集がある．ヒントゥー教至上主義者達の間では秀れた小説家とされるが，左翼系の人たちは文学者のうちに数えていない．

39＊　Catursen shāstrī（１８９１－１９６０）　極めて多作であり５０篇余りの小説，４百篇以上にものぼる短篇を残している．

40　Vimal Mitra　民衆の間でもまた純文学の領域でも等しく人気のあるベンガル語の小説家．

41＊　Bhagwatīcaraṇ Varmā（１９０３－　），Agyey（１９１１－　），Jainendra Kumār（１９０３－　），Yashpāl（１９０３－　），Ilācandra Joshī（１９０２－　），Upendranāth Ashk（１９１０－　）　現代ヒンディー文学界を代表する作家（旧世代の作家グループに入る）

42＊　Premcand（１８８０－１９３６）　ヒンディー語の現代小説はプレームチャンドによって幕あけを告げ，彼の最高傑作“Godān”（牛供養）は画期的な作品となった．

43＊　Sharat Candra Cattopādhyāy（１８７６－１９３８）　ベンガリー語の作家．社会で虐げられた人々の姿を愛情をもってヴィヴィッドに描き読者の共感を得た．彼の作品はすべてヒンディー語に訳され，ある出版社のポケット・ブックスではオリジナルのヒンディー小説家を凌ぐ作品数を出版している．

44＊　Krishan Candar（１９１４－）　ウルドゥー語の代表的な小説家．短篇は２百以上にのぼり，ヒンディー語訳も単行本，ポケット・ブックで出ている．

45＊　Amritā Pritam（１９１９－　）　パンジャービー語の女流詩人，小説家．彼女の小説もすべてヒンディー語訳が出版されている．

46＊ Nirmal Varmā（１９２９－ ），Kamleshvar（１９２８－ ），Rājendra Yādav（１９２９－ ）；Mohan Rākesh（１９２５－１９７３） 現代ヒンディー文学界を代表する作家（新世代の作家のグループに入る）

47＊ Amritlāl Nāgar（１９１６－ ）ヒンディーの小説家．地方を舞台にした社会小説を書いている．

48＊ Rāmlīlā 既出『ラーマーヤナ』に基づきラーマの生涯を芝居にしたもの．ダシャラー祭の際など秋にヒンディー語圏で地域社会の行事として素人たちによって演じられる．また商業劇団によって演じられることもある．

49 Yashwant Sinh Varmā いわゆる文芸的な劇作家の中には数えられない．しかしノータンキー劇と近代演劇の中間を行くものとしてその戯曲は今日も売れている．読まれるばかりで舞台化されることはない．故人．

50＊ Kumāonī 中部パハーリー語に属する地方語．北部州の北部すなわち，アルモーラー，ナイニーターールなどネパール西端に接するヒマラヤ山丘地方で話される．

51＊ Garhwālī 中部パハーリー語に属する地方語．クマオニー語地域の西部で話される．

52＊ Awadhī 東部ヒンディー語に属する地方語．ラクナウ，カンプール，アラハバードなどを含む地域で話される．

53 Bhikhārī Ṭhākur ボージプリー地域で最も人気のあったノータンキー劇団の主宰者。演出家であったが数年前亡くなった．

54 Shrīkrishna Pahalwān カーンプール周辺の農村の住民の間で評判のあったノータンキー劇を主宰し，自作のノータンキーの脚本の出版者でもあった．

55 Natthā Rām Sharmā Gauṛ カーンプールより西方にあるアーグラー，ハートラス方面で名高いノータンキー劇団の主宰者であった．

56＊ Braj Bhāshā 西部ヒンディー語に属する地方語．アーグラー，マトゥラーを中心とする地方で話される．

57 Candrabhāṭ，Balwant 両者はメーラット周辺のノータンキー劇の主宰者．

58 Lakhnīcand，Māṅge 二人とも故人．ハリヤーナー地方ではノータンキー劇の作者として今日なお記憶されている．

59 ノータンキー劇で歌われる歌謡をこの地のことばでラーガニー（Rāgaṇī）と呼んでいる．

60 ベナーレス以東のウッタル。プラデーシュ及びビハールのボジプリー語地域をさす．

61 “Patibhakti”，“Muhabbat Kī Putlī” シュリー。クリシュナ。パハルワーン作の有名なノータンキー劇．

62 “Amar Sinh Rāthaur”，“Indarharan” ナッタラーム。シャルマー。ガウル作の有名なノータンキー劇．

63＊ Parsi Theatrical Company １８世紀末よりボンベイを中心に西洋演劇の影響下にインド人による演劇活動が興りつつあったが，１９世紀半ば頃よりパールシー（拝火教徒）による商

業劇団が誕生するようになった．これらは北インドヒンディー語地域にまで進出し，主にウルドゥー語を用いて通俗的な芝居を演じた．またこれらはヒンディー語による同種の演劇を生み出した．

64　Rādheshyām Barelī　近代の舞台演劇と伝統的な演劇との中間をいく演劇法として今から半世紀前パールシー劇団が大掛かりな劇を舞台化した．その時初めて女の役は女性が演じた．これはトーキーが普及する以前都会で非常に人気を博した．Barelī 市出身の講談師ラーデシュヤームが著した戯曲がそれらによって舞台化されたのであった．Āgāhashr Kāshmīrī, Dil Lakhnavī 等数多くの劇作家の協力も得ていた．

65　"Vir Abhimanyu", "Shravaṇakumār", "Krishṇa Avatār"　ラーデシュヤームの作になる有名な戯曲．

66　Ramesh Mehtā は現代の問題をテーマに戯曲を書き自らも演じているが，純文学の中には数えられない．デリーで上演された劇はかなり人気を博した．パールシー劇団のものよりも水準の高いものであるが文学的な舞台芸術のレベルのものより多少劣る．

67　Jagdīsh sharmā　現代舞台演劇とノータンキー劇の中間をいく劇作家．

68　Ciranjīt, Revatīsaran Sharmā, Gyāndev Agnihotrī　三人とも放送劇作家．ステージでも彼らの作品が上演されることがある．

69＊　Jayashankar Prasād（1890－1938）　チャーヤーワードの代表的な詩人の一人．また歴史上の人物を主人公にした多くの史劇を書いている．前述の"Kāmāyanī"及び"Skandgupta""Candragupta"はデリー大学をはじめ諸大学のヒンディー文学科の教科書に指定されている．

70＊　Jagdīsh Candra Māthur（1917－）　ヒンディー語の劇作家．All India Radio（インド国営放送）に勤務，演出家．サンギート・ナータク・アカデミー（音楽舞踊アカデミー）会員．特に一幕劇，放送劇を手がけている．

71＊　Viṣṇu Prabhākar（1912－）　ヒンディー語の劇作家，小説家．数多くの一幕劇短篇小説を書いている．

72　ここでいう実験主義派（Prayogdharmī）は財政的な困難にもめげずに演劇の分野で新しい実験を試みる意欲に燃えているいくつかの劇団．

73　Tendulkār　マラティー語の有名な劇作家・演出家．その作品はヒンディー語に翻訳・出版され上演されている．"Khāmosh Adālat Jārī hai"は随分評判になった．伝統的な様式を脱して上演されたものは教育ある人達に評判がよかった．

74＊　Baccan（1907－）　ヒンディー語の詩人．

75　正確には Bāl Kavi Bairāgī 民族主義的な詩を朗唱し詩会で名をあげたが，現在別の分野に進出．

76　Gopāl Prasād Vyās　諧ぎゃくの詩人でデリー地区のヒンディー文学協議会の役員である．

77　Kākā Hāthrasī　諧ぎゃく詩人として最も人気がある．これまでに10冊の詩集が刊行され詩会でも名声を博してきている．しかし純文学ではものの数に入れられない．

78＊ Nagendra 博士（１９１５－　）　現在デリー大学ヒンディー文学科教授，評論家．１０数冊の評論集を出版．“Vicār aur Anubhūti”“Kāvyashāstr kī Bhūmikā”　などの著作がある．

79＊ Hazārī Prasād Dwivedī（１９０７－　）　元サーヒトヤ・アカデミー会員．元全インドヒンディー文学協会会長．彼の著作分野は随筆，評論，小説，宗教，歴史など多方面にわたっており２０余りの著作がある．代表作に“Bāṇabhaṭṭa kī Ātmakathā”（バーナバッタの自伝），“Hindī Sāhitya kī Bhūmikā”（ヒンディー文学序説）――文学史，“Ashok ke Phūl”（無憂華）――随筆集があげられる．なお評論集“Ashok－Parv”にて１９７４年度サーヒトヤ・アカデミー文学賞受賞．

80＊ Rāmcandra Shukl（１８８４－１９４０）　ヒンディー文学史家として画期的な業績をあげた．また随筆，評論の分野でも数多くの作品がある．

81　一般に随筆は退屈な文学ジャンルと考えられているので　ラリット・ニバンド（Lalit Nibandh）と名付けて内容は真面目なものであっても興をそそる随筆でもあるような感じを読者に抱かせるという仕かけである．

82　ヒンディー語で大学程度の書物が刊行されていなかった分野について著述・刊行の推進のためにインド政府はヒンディー語圏のすべての州に対して巨額の資金を調達した．その資金で設立された各州の出版振興組織がここでいう Sāhitya Akademī である．

83＊“Bhagavad Gīta”　古代インドのサンスクリット大叙事詩「マハーバラタ」（全１８巻）の６巻に折りこまれた挿話であるが独立した形で「ウパニシャッド」，「ブラフマ・スートラ」と並ぶ宗教書としてまたヒンドゥー教徒の座右の書―聖典として友人のクリシュナから教えを乞う問答の対話形式をとる７百余りの詩篇で構成されている．　今日もなお広く読まれている。

84＊ Bhakti とはヒンドゥー教において信愛とか帰依とか訳される言葉であるが，熱烈な信仰心を神に捧げ恩ちょうにあずかることにより解脱が得られるとする．

85＊ Vivekānanda（１８６３－１９０２）　カルカッタ出身の思想家・宗教家．世界の宗教は一つと説く師のラーマクリシュナの教えを受継いで宗教団体ラーマクリシュナ・ミッションを設立．現在この団体はインド国内，海外に多くの支部を持ち宗教活動とともに慈善事業を行なっている．

86＊ Swāmī Rāmtīrth（１８７３－１９０６）　本名 Rāmtīrth，パンジャーブ出身．大学で数学を専攻するが早くからインド及び西洋の哲学書に親しむ．１９００年に出家．アメリカに２年滞在し，１９０４年帰国．スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの影響も受ける．社会改革，民族運動に影響を及ぼした．

87　Ācārya Rajanīsh　現代インドの独創的な思想家である．政治や宗教，あるいは現代の諸科学などあらゆる問題をテーマに講演を行なっている．５０冊以上の講演集がある．プーナにアーシュラム（道場）があり，新しい遁世の道を教えている．いくつかの都市で信奉者達が修練キャンプを設けてやさしいヨーガの教えを手引きしている．昨今，Bhagwān Shrī Rajnīsh の名で親しまれている．　（糟谷博子訳）　筆者紹介 → P．６０

（P．１２　の続き）

筆者紹介

Dayānand Varmā　１９３０年ムルターン（現パキスタン領）に生まれる．家は代々，同市で書店を経営．１９４７年インド。パキスタン分離に伴いデリーに移る．デリーに移住後も家業に従う．読書は物語。推理小説から始まったが，心理学。哲学書に親しむようになる．１９５５年頃よりものを書き始める．１９６２年に最初の随筆集を出す．現在，書店。出版社 Punjabi Pustak Bhandar，Star Publications などの経営のかたわら，月刊誌“Prakāshit Man”の編集発行人．全インド　ヒンディー出版社協会の副会長．著作は小説“Zindābad Murdābad”，随筆“Pashcim ke Tīn Rang”，“Ham Sab aur Wah”，“Mānasik Saphaltā”のほか性心理学関係の“Yaun Vyavahār Anushīlan”がある．